

博田 巖
2007 82nd INTERNATIONAL SIX DAYS ENDURO
参戦報告記



博田 巖 82nd INTERNATIONAL SIX DAYS ENDURO 参戦報告記



ワールドトロフィー 12位(参加 20カ国)

#15 内山 裕太郎	E1クラス	43位	YAMAHA WR250F
#34 池田 智泰	E1クラス	41位	YAMAHA WR250F
#48 鈴木 健二	E1クラス	33位	YAMAHA WR250R
#85 近藤 有介	E2クラス	49位	GASGAS EC250
#95 小菅 浩司	E2クラス	48位	KTM 250EXC
#162 博田 巖	E3クラス	28位	GASGAS EC300

第82回インターナショナルシックスデイズエンデューロが2007年11月12日～17日の日程で開催されました。昨年より挑戦が始まった日本代表トロフィーチームの一員として多くの方々の応援のおかげで昨年に続き参戦することが出来ました。個人的には改めて力不足を感じる場面ばかりだったのですが、日本の皆さんの応援、大津監督をはじめサポートスタッフの皆さんの力、チームメイトたちの力強い走りに励まされ、6日間走りきることが出来ました。本当にありがとうございました。

サポートスタッフ5人、ライダー6人という小さな日本チームでしたが、自分の出来ることをしっかりやるというまとまりのあるチームが最終日に順位を上げることに成功し、12位という結果を残すことが出来ました。この最高の仲間と過ごし、走れたことに改めて感謝したいと思います。

04 ブラジルに続き2度目の南米での開催となったチリ中部のリゾート地ラ・セレナは乾燥した台地が海のすぐそばまで迫るエンデューロというよりラリー的な雰囲気が漂う場所でした。大会のルートも日本では考えられない勾配のきついガレた岩山や、延々と続く枯れ川、また殆どが砂の中の道、テストも殆どがサンドというまさにデザートインシックスデイズ。以下は日記形式での報告になります。



11月12日 DAY1

いよいよ始まる今年のシックスデイズ、日本チームのみんなの姿を見送り、いつものように一人遅いスタートを待つ。2年続けてこの場所に立てるとは思わなかったが、今こうしてスタートを目の前にしているのを不思議に思う。たくさんの方々の応援のおかげだと思う。欲を言えばもう少し準備期間があれば良かったのだが、そういったことも含めて自分の力を試すことが出来るのがこのエンデューロという競技の面白い所でもあり未だに惹きつけられる魅力の一つなのだろう。

さて、最大排気量 E3 クラス、1組目は#150 キャッセリ(USA、今年のオーバーオールウィナー)#151 ブットゥーリ(イタリア)#152 タッカラ(フィンランド)の豪華メンバー。その後#158 カデック(チェコ)#159 プラネ(フラ

ンス) #175 サロネン(フィンランド) #177 ベッロティ(イタリア) #189 ビヨン・カールソン(スウェーデン)等々、トップライダーのすぐ近くで走れるのがこのクラスの魅力。ルートやテストでお手本になる様な走りやタイムチェックやパドックでの姿が見られるのは嬉しいが、残念ながら今の自分の実力ではテストで別次元のスピードで追い抜かれることを覚悟しないとイケない。

今年のゼッケンは #162、同じ組には長身のイギリス人 #160 マコウネル、ダカールラリーで大クラッシュをして大腿骨を折ったなんて話をしてくれたハンガリー人 #161 カッタイ、よろしくという感じで握手をしてパルクフェルメに入る。初日ということで特にすることも無く、サポートの中島さん、平地さんに見送られスタート台に並ぶ。まずはスタートラインに並ぶことが出来たことに感謝しながらキックを踏む。エンジンもすぐにかかり順調に走り出す(毎朝このキックする瞬間はドキドキする)。スタートの余韻を楽しむ間も無く、スタート直後に控えるパドック横のテストに向かう。このS/T(スペシャルテスト)1・8はこれから毎日スタート後、ゴール直前に走るタフなサンドテスト。早速後ろからスタートした組の #163 プレッケンポル(オランダ) #164 ウィックシェル(スウェーデン)に次々にパスされる。あっという間に見えなくなってしまった。同じ組の2人もなかなか速く1人取り残された気分。それにしてもうまく走れない、スタート直後から気の滅入るテストだ。

パドックから南に進む DAY1・2 のルートは T/C(タイムチェック)1 から T/C2 まではなんと滞在しているホテルの前の砂浜を走る大胆なもの。授業前の学生たちが大きな声援を送ってくれる。T/C2 からはいよいよ本格的なルートに入り、埃の多い S/T2 をこなし、向かった先は尾根伝いの遠くに美しい海の景色が広がる道。しかし景色を見る余裕は全く無い。尖った岩がごろごろした勾配のきつい細い道が続き早くも腕がパンパン。周りのライダーたちはスタンディングでスイスイと走っていくのに GASGAS のマッピング切り替えスイッチ、メツラータイヤに助けられバタバタと進む。早くも遅れ気味、どうにか岩山を抜けると今度は埃のひどい砂のルートが続く。今日はまだいいが明日になるとギャップだらけになるのだろう。

砂浜を走り T/C3 に。絶対早くもオンタイムならずと思っていたが余裕のあるタイム設定ということでエアクリナーの交換も出来ほっとする。今回もいつものように GASGAS のサポートパッケージのお世話になるのだが、コロンビアの GASGAS インポータースタッフがチリ・ホンダのテントを借りてのサポート。初めは心配だったが身振り手振りで大丈夫ということが分かって安心する。T/C には所々で平地さんや平田さんが合流するが、何もなくても日本語で少し話すだけですごく気分転換になる、頼もしい限りだ。

T/C5 まではテストも無く埃の多い砂の中を延々と走られる。まるでアベレージの上がないラリーの様なコースだ。T/C5 の後、埃の多いテストをこなし、意外とグリップするので登れるのだが見た目にはかなりの勾配の丘を登ったり下ったりを繰り返す起伏が多い砂の中のルートを進んでいく。T/C6 の後に続く S/T4 は海岸脇のすぐロケーションのよい砂丘越えの様なサンドのテスト。まだギャップも少なく気持ちよく走ることが出来たが、タイムは伸びず。その後は本日のハイライト、T/C2 から続いたあの岩山の逆走。ここで止まったら再発進は不可能と思うような坂道を何度も越えていく。もう少しで T/C という尖がった岩がゴロゴロする下りで #177 ベッロティ(イタリア)が何事も無く走り去っていく。転ばないように進むので精一杯、タイムに余裕があって良かった。テスト後はよくこんなところをコースに出来たなと思うような美しい砂浜を再び走りパドックへ。最後のテストをこなし、リヤタイヤの交換、エアクリナーの交換、GASGAS メカニックによるオイル交換で終了。他の日本人ライダーも無事にゴールしている。

11月13日 DAY2

今日も昨日と同じルート、今日はテストをしっかり走ろうとするが S/T2 で早くもつまづく。スタート直後のヒルクライム、昨日と同じラインで入ったのだが埃で見えなかった先にはガッポリ掘れた溝が、なすすべも無く見事にハマル。観客に助けを求めようと周りを見渡すと大津監督がビデオカメラを回す姿が……、ライン教えてよ。自力で脱出するが大きくタイムロス、その後も埃で見えずに轍で転倒など全く良いとこなし。この日は S/T3 でも轍を外れ転倒し、コースアウト。その先はキャンパーでコース復帰に手間取りまたタイムロス、しかもコーステープカットのおまけ付。

その後 T/C6 前のルートでも砂の中に叩きつけられる。体は大丈夫だったがサイドカバーがめくれエアクリナーがむき出しに。幸い昨日苦労した帰りの岩山ルートがキャンセルになり舗装路での移動、T/C7 で時間がたっぷり余りしっかり直すことが出来て助かる。2 日目のルートは荒れ方も半端じゃなかったがこのキャンセルで少し楽な展開に。この T/C7 では珍しく他の日本人ライダー達とも合流、ルートでリヤタイヤに針金が絡まった # 15 内山選手以外はみんな順調。テストではウエストバックの荷物持ちをして声援を送る。今年は自分のウエストバックは北海道のベテラン ISDE ライダーのまねをして見知らぬ外国人サポーターに預けることに。ほとんどのテストのインとアウトが同じ場所ということもありみんな親切に預かってくれとても助かった。ウエストバックを外すと“さあテストだ”と気分も盛り上がる。今日は前後タイヤの交換、直前にテストがあるのでムースがパンパンになり、外すときに手間取るが中島さん、平地さんのアドバイスを受けながら冷静にタイヤ交換をこなし終了。今日も宿に帰りしっかりストレッチ、すでに体がバキバキ。



11 月 14 日 DAY3

朝、大津監督に 41 分のペナルティがついていると告げられる。やっぱり昨日のコーステープカットか?! ちょっぴりショック。(大津監督の抗議のかもしれないこの日のリザルトからはペナルティが消える。ISDE では良くあることだが)

この日からルートが変わり DAY3・4 はパドックから東に山岳地に向かうルート。スタートしてすぐに 2 つのテストをこなすと後は T/C4 まで延々とルートが続く、その分大変な行程が予想される。が走り出すと周りのライダーは意外とスローペース。プリライダーを走らせられる国(ほとんどの国がそうだが)は、やはりしっかりとペース配分をしている。

T/C2 までは空しか見えないような大きな坂を登ったり下ったりダイナミックな尾根伝いの道が続く。所々ガレ場も出てくるがまだ荒れてないので、昨日までのきつさは今日はまだ無い。T/C2 からは舗装路を少し走り、谷間に続く埃の多い林道を進む。途中から道は細くなりラインを外す事は想像したくないようなキャンバーの狭い谷間の道を守る。

その後またダイナミックな尾根伝いを走り最後は広い河原のようなところに出て T/C3 に。T/C4 までは大きな山肌を抜けていく相変わらず埃がすごいが比較的快適に走れる林道ルート。大きなダム湖畔の舗装路を走り T/C のある町ビクーニャに。街中の公園に設けられた T/C には大勢の観客が集まっていたかにもエンデューロらしい雰囲気の良い感じだ。

その後は、玉石がごろごろし、転倒しない様に走るだけで精一杯の河原のテスト(もちろん周りのライダーはしっかり攻めている)をこなし再び山の中に。今度は山の中の枯れ川のルート。すでに 150 台も走っているのに気を抜くとルートを見失いそうな薄いタイヤ跡しか残っていない。所々大きな岩を超えても走りにくい川底の道が続く。海からの風が届かない山の中はとても暑く大汗をかきながらの走行。T/C5 から 7 まではほとんど舗装路での移動。T/C7 から 8 までは T/C1 から 2 の逆走だが行きよりもタイムが厳しいような気がする。これは飛ばさないといけないと思い、しっかりと走るが時間はぎりぎり。みんなは大丈夫だっただろうか？

行きはタイム計測の無かったガレたテストでは全く埃で見えない中を追い越されていく。明日からは後の速いライダーを先に行かそう。この日は思いのほかフロントタイヤが消耗していたガリヤタイヤのみの交換、少し慣れてきたこの日は冗談も言いながらの作業。みんなも無事にゴールしている。この日は中華レストランで中休み。

11 月 15 日 DAY4

幸い昨日のペナルティも消えほっとする。舗装路も多い昨日と同じルート走りければルートを走るのは明日だけということで気分的には余裕のある 1 日のスタート。これでテストもしっかり攻められればいいがそう上手くは行かない。朝一の 2 本のテストは全くダメ、ただ走らされている感じ。前日転倒して左手

を痛めた長身のイギリス人 #160 マコウネルはなんと今日は片手運転。それでもガレた登りや、キャンパー走行もスイスイと走っていき、下手すると離されてしまいそうになる。なんというバランス感覚だろう。林道では#161 のカットイと埃を避け並んでの走行、まるでラリーだ。4 日目にもなると言葉は通じないがお互いを大事に思うようになってくる。

河原のテストはこの石の中を走って何でこんなにギャップが出来るの？という状況に驚かされる。昨日は苦勞した枯れ川のルートはバッチリラインが出来、時々石にビックリさせられながらもスムーズに走ることが出来た。コロンビア GASGAS のボスも各 T/C に回ってくれいろいろと声をかけてくれ安心だ。この日は前後のタイヤ交換、メカニックによるオイル交換を済ませ無事に終了。疲れが溜まってきた様でえらく早い時間から寝てしまう。



11月16日 DAY5

いよいよルートを走る最後の日、この日は北に伸びるルート。初めて走るところが多くギャップも少なく走りやすいだろうと思っていたが、T/C1 から2にかけてはまたまたガレガレの厳しい岩山ルート。また体のほうも自分が思っている以上に疲れているようでテストでも全く思うように走れずガックリ。T/C2 の後、海を見下ろす高台の砂のテスト、海岸沿いの砂丘越えのスピードののる2つのテストが続く。

昨日の帝王ユハ・サルミネンのリタイヤを受け、ほぼオーバーオール勝利が確定した #150 カート・キャッセリを追いかけるヘリコプターで騒然とした雰囲気。帰りにも再び走るこの高台の砂地のテストでは時間に余裕もありキャッセリの走りをじっくり見ることが出来た。サンドコースをファンタスティックなライディングで豪快に攻める姿は、早くも王者の風格も漂う。ゴール直後に出る電光掲示板の5分14秒のタイムを見て会場がどよめき、ニューヒーローの誕生を心待ちにしているような感じだった。

このテストを過ぎると所々で大きな岩を越えながらの気が抜けない狭い海岸線のルートが続く。途中岩越えをする時にチェーンガイドをヒットさせチェーンが外れる。直している間にやってきた #175 サロネン (フィンランド) はまるでトライアルライダーの様な華麗な走りでも何も無かった様に大きな岩を越えて行く。その後 T/C3 から5までは豪快で走りやすい林道やスピードののる広い台地の中のピスト、鉄塔沿いのストレート等まるでラリーのコースの様なルートが続き楽しませてくれる。再び2本続くテストを終えると今大会を象徴するようなガレ場と砂のルート。

最後のテストは力尽きたという感じで全く攻められずに終わる。やはりこの環境の中で最後までしっかりテストを走れる様にもっとタフにならないといけな。明日のファイナルクロスを残すのみという安堵感の漂うパドックに戻り、今日はタイヤ交換もせずにパルクフェルメにバイクを入れる。無事に今日まで走りきった仲間たちの笑顔に迎えられる。

11月17日 DAY6

いよいよ最後のファイナルクロスの日。

今年はクラブとトロフィーが別々のレースを行うので人数が少ない。E3 クラスは全員が一番最後のレース。きっと2ラップはされるだろう。時間はたっぷりあるのでコンテナの整理等をして過ごす。

クラブのレースが終わりいよいよ E1 クラスからレースが始まる。#15 内山選手、#34 池田選手、#48 鈴木選手が同じ組でのレース。1 コーナーで転倒に巻き込まれた鈴木選手は最後尾からの追い上げを見せる。この熱い走りに、場内アナウンスでも“スズキ・ハポネ”と連呼され会場中が盛り上がる。日本で応援してくれる人にも見せたいほどのすごかった。トップには届かなかったけど昨年とは全く違う形で日本をアピールしてガッツポーズでフィニッシュジャンプを決めてくれた。

続いて E2 の #85 近藤選手 #95 小菅選手のスタートを見届け、いよいよ出番だ。今大会を象徴するようなだめな走りでも全くとくまなく走れず他のライダーの邪魔にならない様に走るのので精一杯。チームのため

にとんとか踏ん張ってチェッカーを受ける。やはり 2 ラップ遅れ。ゴールラインで小菅選手、池田選手の祝福を受ける。

今年は 6 人全員完走し、喜びを分かち合うことが出来た。この最高の仲間と過ごした 6 日間にありがとう。ルートは大変だったが意外と楽しく走れた気もするがテストは全く攻められなかった今年のシックスデイズ。もし次があるならもう少ししっかり走れるようになってないといけないと強く思った。

まだまだ来年以降も続く日本チームの挑戦、今後も応援よろしくお願いします。

博田 巖

